

## 牛首から羊頭に変わった「みかけだおし」の言葉

英語では表面と内容が一致しない見かけだおしのことを "Cry wine and sell vinegar" (ワインと声をあげ、酢を売る) という。

東方の国では同じ意味あいだ「羊頭をかかげて狗(犬の意)肉を売る」、これを縮めて「羊頭狗肉」という。

例える物は違えど、考えることは洋の東西を通じて同じである。

ところがこの言葉、もとをただすと羊ではなくて牛のことだったのである。

中国古代は春秋時代の『晏子春秋』(齊の名宰相晏嬰の言行録)に次のような話がかつて載っている。

齊の靈公(在位紀元前五八二〜五五四)は変わった趣味を持っており、後宮の女たちに男装をさせることを好んだ。

彼のこの趣味は国中に広まり、宮女でもないのに男装をする女性が多くなった。

そこで下賤な女まで男装をするのはけしからぬと男装禁止令を出した。

しかし、いっこうに守られる気配もない。

靈公にはその理由がわからない。

宰相の晏嬰に尋ねた。晏嬰は「陛下は宮廷内では女性に男装をさせておきながら、外では禁



止している。

ちように牛の首を門にかけて、中では馬肉を売っているようなものです。猶牛首を門にかかげ、馬肉を内に売ることがとしく。

宮中で禁止さえすれば、外でも男装する女性はいなくなるでしょう」と答えた。

そこで宮廷内で禁じたら、たちまち流行はやんだという。

実際に馬肉を売った故事からではなく、例え話からの言葉である。

例え話だから時代が移るにしたがって動物が変わり、宋代の『無門関』(十三世紀初めの禅書)では、「羊頭をかかげて馬肉を売る」とまで変わっている。

それが今の「羊頭をかかげて狗肉を売る」と馬が狗にいつ変わったのかはわからないという。

いずれにせよ牛・羊の肉の方が、馬・狗より愛好されていたのは確かだろう。